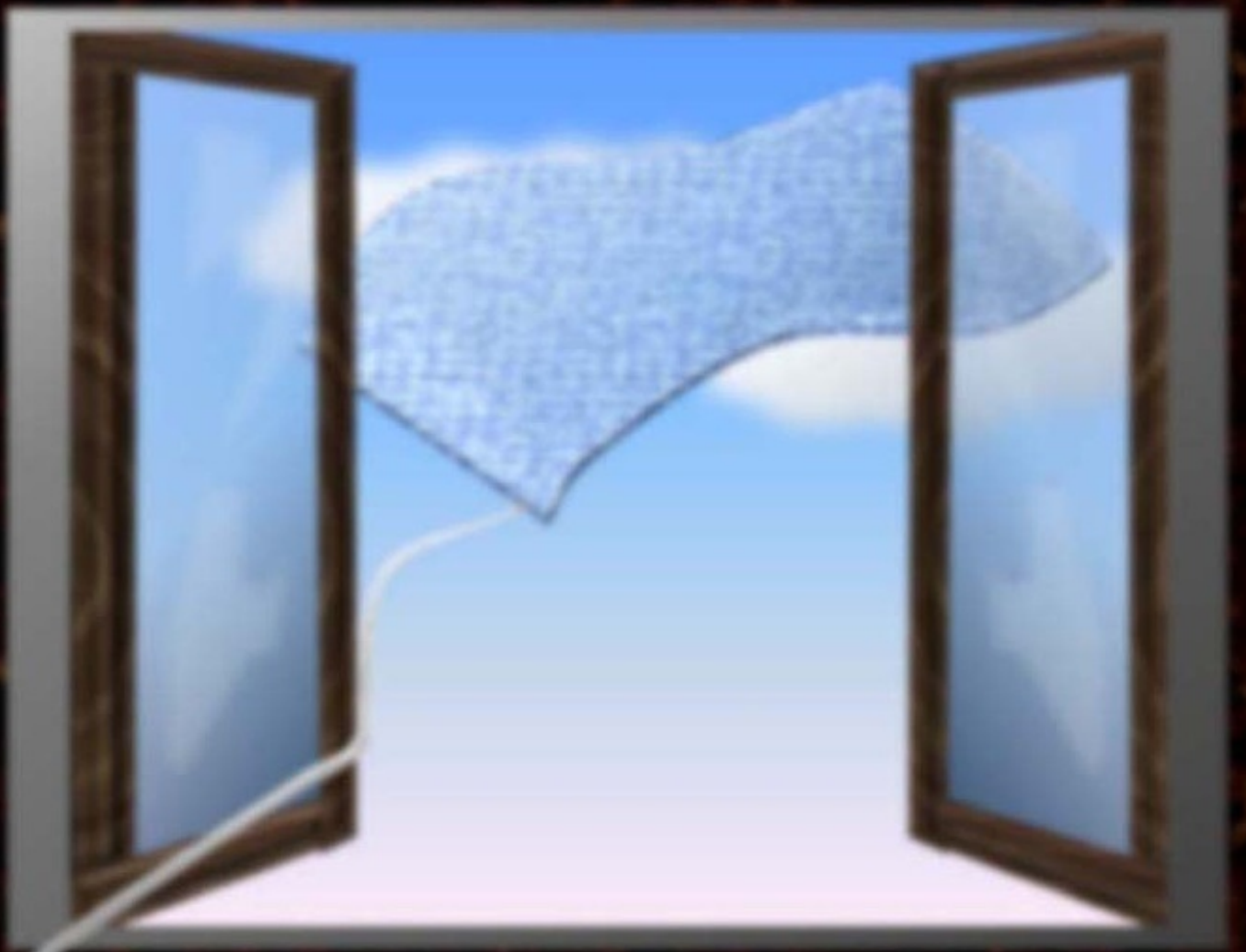


週刊

夢の窓

No.15



むうにい

恐怖のピンク・ファッション

わたしは膝を抱えて座っていた。カーテンを引き、テレビもラジオもない、がらんとした部屋で。

携帯が鳴る。

組んでいた手を数ヶ月ぶりにほどき、わたしは電話に出た。

「はい、むうにい……」

「おっ、生きてたか。ここんとこ姿を見せねえから、くたばっちゃったかと心配したぜ」桑田孝夫の懐かしい声が聞こえてくる。

「ずっと部屋にこもってたよ。世の中は世知辛いからね」わたしは言った。

「ばかなこと言ってねえで、外に出てこい。いつもの噴水広場で待ってるからな」

それだけ話すと、一方的に切ってしまう。固定電話なら、受話器の向こうから、ツー……と音が聞こえるのだろうが、携帯はその点、クールだ。うんとも、すんともいわない。

どっころしょ、とわたしは立ち上がった。あんまり久しぶりに立ったものだから、この世に存在するのは安物のカーペットだけではない、ということをつまんなか思い出せずにいる。

「天井って、こんなに低かったんだ」わたしはつぶやいた。空気までも違って感じられる。たかだか数十センチなのに、重く淀んだ匂いから、色つきのポップリに変わったかのよう。

洋服ダンスの扉を開け、ナフタリンの刺激臭にちょっとだけ顔をしかめる。

わたしは外出用の服を選んで、袖を通した。

玄関で靴を履いて外へ出る。直射日光が重力を帯びてのし掛かってきた。すっかり、夏の日射しだ。

道の向こうから、ピンク色の全身タイツを着た男がやって来る。お笑い芸人だろうか？ 片手にはアタッシュ・ケースを提げ、もう片方の手でスマート・フォンを操作しながら歩いている。

ど派手なコスチュームをのぞけば、どこにでもいそうな営業マンだった。

大通りに出て、わたしは自分の目を疑った。

道ゆく人、誰も彼もがさっきの人同様、ピンクの全身タイツ姿なのだ。

エコ・バッグに買い物を詰め込んだ主婦、商店のオーナー、イヌを散歩させているおじいさん、子供、1人残らずピンク色である。

「これが今のトレンドなの？！ 世の中の移り変わりは激しいなあっ」わたしは呆然と見守るのだった。

いつの時代でもそうだが、流行に乗り遅れた者は、周囲から奇異な目で見られる。

今、この雑踏の中で、わたしはまさしくそんな立場だった。コットンのジーンズに、ユニクロのTシャツ、その上から麻のジャケットを羽織っている。そんなわたしに、通り過ぎる人々は無遠慮な視線を投げつけていく。

公園の噴水前へとやって来た。

ここでも、ピンクの全身タイツばかりである。辺り一面、桜でんぶをまぶしたかのような風情だ。

噴水のそばのベンチで、桑田が退屈そうに足を絡めているのを見つける。やっぱり、ピンク色だった。

「桑田、待った？」わたしが声を掛けると、ギョツとしたような目を向けてくる。

「な、なんだ、おまえ、その格好っ！」

「えー、変かなあ」とわたし。

「ったりめえだろ、きつしよいなっ」桑田はあからさまに嫌そうな顔をする。「どうしてこう、団体行動ができねえんだろ、お前って奴は。今どき、ピンクの全身タイツを着てねえってのは、裸で外を

歩いているようなもんなんだぜ」

わたしはドキッとして、周囲を見回した。

遅まきながら、自分の格好が恥ずかしくてたまらなくなる。

学校へ行く途中の道に、柿の木のある家がある。その家で世話をしているイヌは、しょっちゅう庭から出て、道端をうろついていた。

痩せこけて薄汚れ、いつも目やにでいっぱいだ。かなりの歳なのだろう。鼻は乾き、歩き方にも覇気がない。

人が怖いのか、誰かが道をやって来るたび、家のある側へと身を寄せて縮こまってしまう。

ある朝、わたしがいつものように通りかかると、板塀の向こうから声が聞こえた。

「シロや、今日もご飯抜きだよ。やれやれ、お金がかさんで、たまらないよ」

この家の主らしい。どうやら、ろくにご飯も食べさせてもらえないようだ。

遅刻を覚悟で、隙間から中の様子をうかがってみた。

庭の片隅に、半ば雑草で埋もれながら、みすぼらしい小屋が置かれている。その脇でぐったりと寝そべっているシロ。

鎖につながれてはいるものの、その首の細さと比べて、ひどく不釣り合いだった。

それが証拠に、主が家へと引っ込んだところを見はからって、するりと首輪を抜けてしまう。

シロはよろよろと立ち上がり、板塀の隙間をくぐって、いつものように道端へと出てきた。

わたしの方にちらっと目をくれ、その場に座り込む。

「シロ……」わたしはそっと声を掛けてみた。「君、シロって名前なんだね」

ピクッと片方の耳をかすかに動かすが、じっとあちらを向いたままである。目を合わせたら最後、きつとひどいことをされる、そう信じているらしかった。

それからのわたしは、通学のたび、シロに話し掛けた。

「おはよう、シロ。ご飯はちゃんともらえた？」

シロも次第に打ち解けてきたようで、わたしの言葉に反応してくれる。しっぽをパタン、と振ってみたり、舌を出して見せたり。

時には、まるでこちらの話がわかるかのように、うんうんとうなづくことさえあった。

帰り道、ビニール袋に残して持ってきたパンやおかずを、こっそりと目の前に置いてやりもした。

ただ、どういうわけか決してその場では食べようとせず、庭まで持って帰る。家の主が、そう躡けているのに違いない。

ろくに面倒も見ず、ただ厳しいだけの主に、わたしはだんだんと腹立ちを覚えてきた。

雨上がりの通学路、まだ道は湿っているのに、シロは伏せたままわたしを待っていた。

そう、シロは確かにわたしを待っていたのだ。道の曲がり角からわたしが姿を現すと、心なしかうれしそうに体を持ち上げてみせる。

けれど、いつになくしんどそうで、舌もだらんと垂れ下がったままだ。

「おはよう、シロ。どうしたの？ 少し、疲れてるんじゃないの」わたしは心配になってそばにしゃがみ込む。

シロはじっとわたしを見つめている。

わたしはその背に手を置いてみた。初めて触れる、シロの体だった。古いモップのようにガサガサとしている。けれど、血の通った暖かさが間違いなくそこにあった。

「シロ……」なぜそうしようと思ったのか、わたしは自分のおでこをシロのおでこにくっつける。

やさしい温もりが伝わってきた。

休日を挟んだ翌日、いつもの道にシロの姿はなかった。

嫌な予感がして、庭先をのぞいてみる。

すると、犬小屋は潰され、代わりに土まんじゅうができていた。

わたしは全てを悟り、同時に激しい怒りが湧き起こった。

足音も荒く敷地へと入り、インターフォンを叩く。すぐにあの主が現れた。

「あなたは最低の人間だと思う」相手が口を開くより早く、わたしは痛烈にののしる。

「わしが？」主は心底驚いた顔で聞き返した。

「シロはもっと幸せになるべきでした。世話をしている以上、それは当然のことじゃありませんか」

主は、合点がいったとでもいうようにうなづく。

「ああ、あんたは毎朝シロに食べ物をくれていた方ですね。シロもきっと嬉しかったに違いない。あんたが通る頃を良く知っていてね、いつもふらっと外に出してしまうんですよ」

主は土まんじゅうへと向かって歩きだした。その傍らに、何かを掘って埋めたような跡がある。そこを指さし、こう言う。

「シロめ、あんたからもらったもんを、みんなそこに埋めとった。なんせ、重い病気でしてね。ほとんど物が食べられなかったんですよ。薬代ばかりかさんでしまって……」

「じゃあ、ご飯をあげなかったわけじゃなかったんだ」わたしは愕然とした。

「まあ、あんたがそう誤解したのも無理はないですよ。骨と皮ばかりでしたからなあ」

土まんじゅうの前に屈んで、手に持っていた板きれをずぶりと立てる。

〔シロ、ここに眠る〕

心のこもった、丁寧な楷書でそう記されていた。

「シロはかけがえのない、わたしらの家族でしたよ」そう言って、手を合わせる。

わたしもその横に並んで、シロの冥福を祈った。

シロがいなくなってしまったことは寂しい。では悲しいか、と尋ねられれば、不思議とそんな感情は湧かないのだった。

今、ようやく知ったからである。シロがどれだけ幸せだったかを。

池袋駅前、いつもの喫茶店で桑田孝夫を待ち合わせる。

「いらっしゃいませ。お1人でしょうか？」店員が満面の笑顔であいさつをする。

「あ、いえ。あとから、もう1人来ます。」

「では、お席をご案内しますので、こちらへどうぞ」

奥のボックス席へと通されるわたし。一応、メニューを開いて眺めるが、注文するのはいつもと同じアイス・コーヒー。

ストローを噛みながらスマホに目をやると、約束の時間をもう、10分も過ぎている。桑田の奴、今日もまた遅刻かあ。

「わりい、わりい」そう言いながら、ようやくやって来た桑田。「電車が混んでてよお。これでも、早めに出たんだけどな」

「いいよ、別に。今までだって、時間通りに来たためしないじゃん」わたしは気にも留めなかった。

「あ、おれもアイス・コーヒーにするかな。それと、ピザ・トースト」桑田はどっかりと席に腰を落とす。

今日は、「アバター2」を観に来たのだ。前作で死んだと思われた、グレイス・オーガスティン博士が、今作で復活するらしい。

「エイリアン・シリーズ以来の当たり役だったな、シガニー・ウィーバー」桑田はピザ・トーストをほおぼりながら話す。ポロポロとオニオン・スライスが落ちる、落ちる。

「絶対、生き返らないと思ったけどね。そもそも、『2』ができるなんて、想像もしてなかった」とわたし。

「まあ、売れりゃあ、いくらでも続編を作るさ。それがお前、商売ってもんだ」

「そうかもしれないね」

上映時間が迫ってきたので、わたしたちはシネマ・サンシャインまで歩いて行く。

「うわあ、けっこう混んでるね」わたしはうんざりした声を漏らした。

「でも、入れ替え制だから、座れるよ。さ、入ろうぜ」

席は前の方だった。スクリーンが眼前いっぱい広がって、大迫力だ。

本編が始まるまで、退屈な宣伝フィルムがだらだらと流れる。どこそこのチャペルで素敵な式を挙げようだの、ここのレストランはステーキがおいしい、など。

宣伝が一通り終わると、今度は頭がビデオ・カメラといういでたちの、見るからに怪しい人物が登場し、「映画泥棒はダメだぞっ！」と関係のない観客まで叱責するのだった。

「強制的に見せられるから、映画館って敬遠したくなるんだよね」わたしはぼそっと桑田に耳う

ちをする。

「同感だ。高い金を取って、しかもこれじゃあなっ」

やっと本編か、と思いきや、さらに近日上映の作品が次々と紹介される。それも、つまらなそうな映画ばかり。

「ねえ、桑田。本編が始まったら起こしてくれる？ それまで、ちょっとだけ寝させてもらうから」わたしは頼んだ。

「ん？ ああ、いいぞ。寝てろ、寝てろ」

わたしは、あっという間にブラック・アウトしてしまう。

喫茶店のソファで、うつらうつらと目を醒ます。

ストローを噛みながらスマホに目をやると、約束の時間をもう、10分も過ぎている。桑田の奴、今日もまた遅刻かあ。

「わりい、わりい」そう言いながら、ようやくやって来た桑田。「電車が混んでてよお。これでも、早めに出たんだけどな」

「いいよ、別に。今までだって、時間通りに来たためしないじゃん」わたしは気にも留めなかった。

「あ、おれもアイス・コーヒーにするかな。それと、ピザ・トースト」桑田はどっかりと席に腰を落とす。

今日は、「アバター3」を観に来たのだ。前作で死んだと思われた、ジェイク・サリーが、今作で復活するらしい。

「ターミネーター4以来の当たり役だったな、サム・ワーシントン」桑田はピザ・トーストをほおぼりながら話す。タラタラとチーズが垂れる、垂れる。

「今度こそ、続きはないと思ったけどね。そもそも、『3』ができるなんて、想像もしてなかった」とわたし。

「まあ、売れりゃあ、いくらでも続編を作るさ。それがお前、商売ってもんだ」

「そうかもしれないね」

上映時間が迫ってきたので、わたしたちはシネマ・サンシャインまで歩いて行く。

「うわあ、けっこう混んでるね」わたしはうんざりした声を漏らした。

「でも、入れ替え制だから、座れるよ。さ、入ろうぜ」

席は前の方だった。スクリーンが眼前いっぱい広がって、大迫力だ。

本編が始まるまで、退屈な宣伝フィルムがだらだらと流れる。どこそこのチャペルで素敵な式を挙げようだの、ここのレストランはステーキがおいしい、など。

宣伝が一通り終わると、今度は頭がビデオ・カメラといういでたちの、見るからに怪しい人物が登場し、「映画泥棒はダメだと、何度言ったらわかるんだっ！」と関係のない観客まで叱責するのだった。

「こう何度も見せられると、うんざりだよね」わたしはぼそっと桑田に耳うちをする。

「同感だ。高い金を取って、しかもこれじゃあなっ」

やっと本編か、と思いきや、さらに近日上映の作品が次々と紹介される。それも、つまらなそうな映画ばかり。

「ねえ、桑田。本編が始まったら起こしてくれる？ それまで、ちょっとだけ寝させてもらうから」わたしは頼んだ。

「ん？ ああ、いいぞ。寝てろ、寝てろ」

わたしは、あっという間にブラック・アウトしてしまう。

ふと目を醒ますと、喫茶店の中だった。

「桑田の奴、今日も遅刻かなあ……」

怪しい露天商

いつも通り、アメ横は大変な賑わいだ。肩を擦り合う人と人との間から見える店舗の前では、店員達が手振り身振りを交えて、闊達に商売文句をぶちまけている。

「安いよ、安いよ、安いよっ！ トロが1本、たったの千円だっ。そこのキレイなおネエちゃん、どうだい、買っていかねえか。ええいっ、赤字覚悟の大まけだい、値段は据え置きで、もう1本つけちゃうよっ！」

「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい。うちはアメ横一、ってえことはつまり、日本一安くて品揃いの多いチョコレート売りだっ。500円玉1個で、ぽんぽんぽーんっと積んじゃうよ。ほら、もう2つ、3つ載せようか。なに、まだ足りない？ ったく、しょうがねえな。よっしゃ、今日だけオマケだ、4つを飛んで、5つ載せたからねっ。ほかじゃ、こんな大サービスは絶対ないよ、ほんとだよっ」

何度来ても、その勢いには押されてしまう。売り手と目を合わせたが最後、買うまでは決して離してくれない。

今日、わたしはエア・マックス／スーパースルーを買いにここへやって来たのだ。アメ横はうさん臭い商店が確かに多いけれど、どこよりも入荷が早い。探せば、ひよっとしたら手に入るかもしれない。

たぶん、見つけても割高だと思うが、時期を逃しては買うことすらできなくなる。

めぼしい靴屋は一通り見て回ったが、収穫はなかった。ガード下も隅々まで見る。けれど、こちらもさっぱりだ。

「エア・マックス2012なら、どっさりあるんだけどねえ。だめかい？」店の主人は、奥の棚から5つも6つも箱を持ち出してきて、そう勧める。

「スーパースルーじゃないとだめなんです」わたしは言った。「だって、ばかには見えないんですよ、あれって。ふつうのエア・マックスなんて履いて歩いてたりしたら、5分もしないうちに狩られちゃう」

「そうかい？ 残念だなあ」店主はしょんぼりと頭を垂れる。

よほど売れないんだなあ。商品は魅力なのだが、今だはびこる「エア・マックス狩り」が怖くて、誰も買う勇気がないに違いない。

問屋街はあきらめて、裏道を歩いてみた。ちょっと入っただけなのに、人がまばらになる。昼間はともかく、夜はなんだか怖そうだ。

時折、露天商が道端にラシャを敷いて座っているのを見掛ける。わざわざ建物の陰に店を広げている様子からして、表だって商売をすることを良しとしない連中なのだろう。

わたしは見ないふりをして先を急ぐ。少しでも興味を持っていると気取られると、それこそダ

二のようにたかられてしまう。

「激レアの輸入時計があるんですよ、お客さん……」背後から、ぼそっと声が掛かる。

無視、無視。わたしは自分に言い聞かせた。

「なんと、なんと。世にも希な、カシオとオメガとロレックスのコラボ商品だよ……」

何だって？！

「それ、本当ですか？」思わず、振り返ってしまう。

「もちろんですとも。その名もO-Shockって言いましてね、世界にこれ1本きりなんですよ」

わたしはとっくに我を忘れて、並べられた時計の前にしゃがみ込んでいた。

「でも、そういうのって高いんでしょ？」わたしは聞いた。

「うーん、まあ、安くはありませんよ。何しろ、たったの1本しか作られてないんですからね」

「おいくらですか？」

「1億8千万円——」

高っ。とても無理だ。

「もうちょっと、安くなりませんか？」呆れたことに、交渉なんかしている。

「わかりました。せっかく足を止めて下さったんだ。1千万では？」

「買いますっ！」相手の気が変わらないうちに、とわたしは即断した。貯金を全部おろして、誰彼かまわず借金しまくれればどうにかなる、とっさにそう考える自分が怖い。

「まいど、ありがとうございます」露天商は、O-Shockをコンビニ袋に放り込んだ。わたしは引き替えに、後払いのサインを書いて渡す。

押さえようとしても浮かんでくる笑顔のまま、わたしは店を後にした。いい買い物をしたぞ。世界中探したって、ここにしかないわたしだけの時計だ。当初の目的だったエア・マックス／スーパースルーなんて、もう、どうだっていい。

角を曲がったところで、別の露天商に呼び止められた。

「滅多に手に入らない、貴重なバッグがあるんですよ……」

わたしの耳がぴくん、と動く。

「ヴィトンとキティとディズニーが手を組んだ、その名もネヴァーフル・キャット・アンド・マウスというトートバッグなんですけどねえ」

VISAは使えるだろうか。リボ払いにすれば、何とかなるかもしれない。

わたしの頭は、あれやこれやと計算を始めだす。

スイカ割り

湘南の浜辺で、夏の風物詩、スイカ割りを始めたわたし達。

「むうにい、お前の番だ」桑田がバットを渡す。後ろからは、志茂田が目隠しにタオルを巻いてくれる。

「バットを軸にして下さい、むうにい君」と志茂田。わたしはバットを砂地に立てた。「回しますよ、それ、1かーい、2かーい、3かーい……」

「何回、回すつもりさ？」だんだんと目が回ってくる。

「いつもより、多く回していまーす」今日の志茂田は、やけにハイ・テンションだ。

結局、50回も回されてしまった。立っているのもやっとだ。

「スイカはこっちな」桑田がわたしの両肩を持って、正面を向かせてくれた。

「ささ、1歩1歩、進んで下さい」志茂田がスタートの合図を切る。

わたしは慎重に足を運びはじめた。熱い砂がとても気持ちがいい。

「このあたり？」わたしは聞いた。

「まだまだ一っ」と2人の声。わたしはさらに数歩、前へ出る。

「ここ？」

「あと、ちょっと」

もう一歩だけ踏み込んで、声のする方を振り向く。「ここかなっ？」

「そうそう、そこだ。一気に行けっ」桑田が大声で促した。

「いまこそ、鉄槌を下すのですよ、むうにい君」志茂田のお墨付きだ、信用してもいい。

わたしはバットを振り上げ、思いっきり叩きつけた。確かな手応えがあり、パッカンと割れる音も聞いた。

それにもかかわらず、周囲からは絶望のため息が漏れる。桑田や志茂田ばかりではなく、浜にいる者すべてから。

「やっちゃったな、おい」桑田が慌てて駆け寄ってくる。

「これは、これは。さて、どうしたのですかねえ」志茂田も、さっきまでの調子とはうって変わって、深刻そうである。

何をやらかしたんだろう、とわたしはおっかなびっくり、目隠しを外した。

わたし達のスイカは丸いまま残っていて、そのすぐ脇で、真っ二つになった地球が転がっていた。中から餡こがはみ出してしまっている。

「誰？ こんなところに地球を置きっぱなしにしたのはっ」わたしは文句を言う。けれど、みんなして肩をすくめ、首を振る。

ライフ・セイバーがやって来て、壊れた地球を前に、縦じわを寄せた。

「これ、君がやったのかい？ とんでもないことをしてくれたなあ。地球温暖化どころじゃな

いぞ、こりゃ」

「すみませんでした。スイカ割りをしてたんですけど、まさか地球が置いてあるなんて思わなくて」わたしは恐縮して言う。「とりあえず、こぼれた餡こを詰め直して、繕いますから、針と糸を貸して下さい」

「そうしてくれるかい？　じゃ、そこの海の家で借りてくるから。ちょっとだけ、待っててね」わたしは地球の前にあぐらをかいて、餡こから砂を払い落とし始めた。

「おれ達も手伝うから」桑田と志茂田も、砂の上にどっかりと腰を下ろす。

ほどなく、さっきのライフ・セイバーがやって来て、裁縫道具を貸してくれた。

「夕暮れまでに終わるかな？　ぼくもバイトなもんで、電車に乗って帰らなきゃならないんだ」

「ええ、たぶん、大丈夫だと思います」わたしは答える。裂け目は、太平洋のど真ん中を、北極から南極にかけて、ほとんど一直線だった。ちくちくと縫い合わせていけば、さほど苦勞せずに仕上がると思う。

「やれやれ、とんだスイカ割りになったな」桑田は餡こを詰め込みながらぼやいた。

「まあまあ、桑田君。そこだっ、叩けっ、なあって煽ったのは、ほかでもない、我々なんですから」そう、大人の対応を見せる志茂田。

「それにしても地球って、なんてあっけないんだろう。これじゃ、毎日びくびくしながら生きていかなくちゃならないよね」

わたしは少しだけ、憂鬱な気分になった。

秘湯を求めて旅する

トラベル・ガイドお勧めの秘湯を求めて、日に1本しかないローカル線に乗り、ようやく山裾までやって来た。

平地よりも照りつける日差しは強かったが、抜ける風は涼しく、かいた汗もすーっと引いていく。

肩からバックパックを下ろすと、エリア・マップを取り出した。赤マジックで丸をつけてある場所を指でたどる。

「えっと、今はここだから、あと40分くらいかぁ」

うねうねと曲がりくねった山道を、わたしはのんびりと歩き始めた。

舗装の荒れた道路は、クルマがようやくすれ違うことができるほど。ところどころ、アスファルトが剥がれ、ぼこっと穴が開いていることがある。

時々、爪先を引っ掛けながらも、この先で待っている隠れ家的温泉に、わたしの心ははやる一方だ。

遠くから、かすかにディーゼル・エンジンの音が聞こえてくる。どうやら、下の方からのようだ。

だんだんと近づいてきて、そのうちつづら折りになった崖下に、バスが見え始める。

「バスが走ってたんだ」トラベル・ガイドを見落としていたらしい。

ブナの木陰に立って、バスが来るのを待つ。

消耗しきったサスペンションを弾ませながらやって来たのは、見たこともないようなレトロ・バスだった。

「すいませーんっ」わたしは道端から手を振る。バスは、ガタゴトと騒々しい音を立てながら、わたしのいるところよりも、10メートルばかり先でやっど停止した。

わたしは小走りでバスまで走り、開いた扉から乗り込む。

「この先の秘湯までなんですけど、料金はおいくらですか？」運転手にそう尋ねた。

「いい、いい。どうせ、すぐそこだから」親切に、そう言ってくれる。

「ありがとうございます」

わたしは、座席に座った。

向かいの席には、小学生から高校生くらいまで、4人が並んで座っている。きっと、知り合いなのだろう。

トラベル・ガイドをパラパラとめくっていると、一番上らしい少年が声を掛けてきた。

「秘湯に行くんですか？ 地元のもんはあまり寄らないですけど、このところの温泉ブームと

かで、よそからたまに見えますよ」

「そうなんですか」わたしは言う。観光地なんて、案外そんなものかもしれない。

「あら、うちの爺ちゃんは、毎週湯治に行ってるわよ」隣の女の子は、きっと同級生に違いない

。

「ああ、おめんとこの爺さまはあの風呂さ、好きだもんな」と少年。

「あーあ、わたしもたまには行きたいな、あそこ」反対端に座って、足をブラブラさせている女の子は、学校に上がったばかりらしい。

「ほら、そんな足をバタバタさせっと、靴が脱げっど。ちっと、大人しくしとれ」注意をしている男の子も、3つか4つしか変わらないはず。

「学校の帰りですか？」わたしは聞いた。

「はい。ぼくら、小学と高校なんですけど、小さな村なんで、同じ校舎に通ってるんです」少年が言う。

「じゃあ、みんな家族みたいなものですね」

「ええ、ほんとにそうなんです。端っこの女の子、あれが中学にあがる頃には、学校も閉校することになってるんです」

「そうなんですか。寂しいなあ、なんだか」わたしはしみじみとしてしまった。

「温泉前に着いたよ、お客さん」運転席から声がし、バスはガタピシと停車する。

わたしは車内のみんなに挨拶をし、バスを降りた。

山あいには抱かれるようにしてそっと建つ、そこがわたしの泊まる旅館だった。

「今日は、予約したむうにいですが」フロントで声を掛ける。

すぐに女将が出てきた。顔を合わせて、お互いにはっとする。

「お客さん、前にもここに来なされた？」女将が不思議そうに言う。

もちろん、今日が初めての訪問だ。

「いいえ、初めて来ました」けれど、わたしも女将の顔にかすかに見覚えがあった。いったい、どこで会ったっけ？

腑に落ちないまま、わたしは部屋へと案内される。

「明日、お発ちになるんでしたね？」女将が確認をする。「下の駅まで、クルマを出しますんで、乗って行って下さい」

「あ、バスに乗って行くから大丈夫です」わたしは言った。

「バスなんて、何十年も前に廃線になりましたよ」

「でも、今、それに乗って……」そこまで言い掛けたとき、女将が誰に似ているのか気がついた

。

バスに乗っていた、一番小さな女の子だ。

「バスには、女の子が乗っていました。その子が卒業したら廃校にしようとか——」わたしはバスの中での話をした。

びっくりしたような顔で振り返る女将。やがて、懐かしそうに表情を崩すのだった。

昼間降っていた雨もすっかり上がり、澄んだ星空が広がっていた。

このところ雨が續いていて、外へ出るのも面倒だったが、久しぶりに公園まで散歩に出てみることにする。

道端の水たまりをよけながら、のんびり歩いて行く。鼻歌が、しっとりと湿った空気の中で染みて消える。街灯の周りでは、さっきまで軒下や葉の陰で雨やどりをしていたに違いない羽虫達が、わんわんと回っていた。

公園には人の気配がまるでない。雨さえ降らなければ、今の時間、夕涼みにちらほらと人影もあるだろうに。

わたしは噴水広場を横切って、プラタナス並木へと向かう。

途中には、公園一背の高いポプラが立っている。月の光を受け、くっきりとした影を落としていた。その影が、いつになくいびつに映る。

薄暗い中、木をよく見てみると、長く伸びた梯子が立て掛けてあるのだった。

「昼間、植木屋が剪定でもして、そのまま忘れていっちゃったのかな」たいして気にも留めず、通り過ぎようとするわたし。

すると、ずっと上の方から、ギーコ、ギーコ、と何かを切る音がする。

後ずさりして見上げると、木のてっぺんで誰かがノコギリを挽いていた。天空にどンドン線が入り、四角く切り取られていく。

切り口がつながったとたん、ぽくんっと音がして、星空が落ちてきた。クルクルと回転しながら、わたしのすぐ脇の芝に、ざっくりと突き刺さる。

「わっ、危なっ！」もうちょっと逸れていたら、体が真っ二つになってしまうところだった。

「ちょっと、その人っ。なんてことしてんのさっ。当たったら大変じゃん！」

ポプラの真上には、ぽっかりと白い四角ができています。慌てふためく男の姿が、影絵となって射す。

「これは、すいませんでした。まさか、下に人がいるなんて思ってもいなかったもので」

男は梯子を降りてきた。わたしの横で、今もきらきらと瞬いている星空に目をくれながら、心配そうな声で言う。

「ケガはありませんでしたか？ 夜だし、さっきまで雨が降ってたもんですからね、人が来るなんて、これっぽっちも考えませんでした。ほんとに申し訳ありません」

「幸い、無事でした。それはともかく、勝手に公共の空を切ったりしちゃまずいんじゃないんですか？」わたしはとがめた。

「ええ、そうなんです、わかっています」男はしょんぼりと頭を垂れる。「実はわたし、この近所でプラネタリウムをやっている者ですが、明日のプログラムで、このかんむり座の空がどうし

ても必要だったんです。それで、悪いことと知りながら、つい出来心で……」

「そんなの、自分勝手です。あなたがかんむり座を持って行ってしまったら、ほかの人が見られなくなるじゃないですか」

「明日、1日だけなんです。なんせ、小学生たちの課外授業がその日なもんで、がっかりさせたくないんです」プラネタリウムの男は切実な様子で言いすがつた。

わたしも、そういう事情なら仕方がないと思い直し、

「じゃあ、明日の投影が終わったら、ちゃんと元に戻してくれますか？ それなら、おまわりさんに通報せず、黙っていますけど」

男はホッとしたように顔をあげる。

「ええ、ええ。約束します。絶対につ！」

次の日の夜、わたしはまた公園に来てみた。天頂には、いつも通り、星が輝いている。

よく見ると、かんむり座の周りにだけ、四角くかがったような跡があったけれど。

週刊 夢の窓 No.15

<http://p.booklog.jp/book/88440>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88440>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88440>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ